



## 岸本佐知子＋都甲幸治

対談



# 無意識過剰な日常日記

## リディア・デイヴィス『話の終わり』

読んでてイタイ！ 共感と驚嘆の小説

**岸本** amazonに「お前はこれも好きだろうシステム」ってあるじゃないですか。

**都甲** そんな名前じゃないですけどね(笑)。

**岸本** amazonで本を買ったりリチェックしたりすると、それを向こうが覚えていて、こっちの好きそうなものを勝手に推測しておすすりリストを作ってくれます。あるときから、そのおすすりのいちばん上にAlmost No Memoryがくるようになって。

**都甲** 最初に訳された『ほとんど記憶のない女』ですね。

**岸本** そのときはリディア・デイヴィスを知らなかったから、何か月も無視していたんですけど、いつまでたっても上

にある(笑)。でも、表紙がルネ・マグリットで、ちょっといい感じなんですよ。「わかったよ、そんなに言うんなら」って根負けして買って読んだら、ものすごく面白かった。

**都甲** こんど訳された『話の終わり』の「訳者あとがき」見て、びっくりしましたよ。リディア・デイヴィスの本って十冊以上あるんですが、「ぜんぶ訳す」と言っちゃってるわけでしょう。

**岸本** 言っちゃった(笑)。

**都甲** もちろんすばらしい作家ですけど、どこにそこまで入れ込む魅力を感じたんですかね？

**岸本** それはですね、わたしは、しっとり書かれた短篇とか、オーソドックスな長篇とかも好きだし、すばらしいと思う

んだけれども、どうしても根が『筒井脳  
なわけです。

**都甲** なんですか、それは？

**岸本** 中三の修学旅行のとき、電車で読  
む用にと、見ず転で筒井康隆の本を買っ  
たんです。忘れもしない『日本列島七曲  
り』という短篇集。読んでみると、それ  
まで読んだどんな小説ともちがっていて、  
「うわあ」って、びっくりしたんですが、  
腑に落ちたところもあって。だって小説  
って文字なんだから、どんな無茶苦茶を  
やってもいいわけでしょう？

**都甲** そうですよな。

**岸本** なのどの小説も、あたかも空気  
を読んだかのように、それなりの型があ  
るといふか、ルールをきちんと守ってい  
る。子供のころから薄々そこに不満をも  
っていたんだけど、筒井康隆に出会  
って、「やっぱりこまでやっていいん  
だー」って腑に落ちた。だからいまだに、  
どこかでぶち壊れる&ぶち壊してるも  
のに心惹かれるところがあって、リディ  
ア・デイヴィスも似た感じの衝撃の受け  
かただったんですね

**都甲** 「小説はこういうものだ」という型  
を守る気がさらさらしないですからね。た

とえば『ほとんど記憶のない女』は、い  
ちおう短篇集なんですけれど、短篇って  
言うにも短い。

**岸本** ほとんど超短篇というか、一、二  
ページのものとか、数行のものまである。

**都甲** 一、三行ぐらいで作品が終わったり、  
ミシェル・フーコーを読みながら、わか  
りやすいセンテンスとわからないセンテ  
ンスの違いについて自分が考えたことを  
書いたりする。自由と言ったら、すごく  
自由。個人的には、岸本訳リディア・デ  
イヴィスは、この超短篇シリーズが続く  
と思っていたんです。だから、次に翻訳  
したのが、長篇の『話の終わり』だった  
のが意外な感じでした。

**岸本** 順序的には、『話の終わり』のあ  
とに『ほとんど記憶のない女』が書かれ  
ているんです。だから原書とは逆の順序  
で訳したわけですが、結果的には超短篇  
というスタイルが多くの読者に受け入れ  
られてよかったと思います。だから次  
も同じく超短篇集の『サミュエル・ジョ  
ンソンが怒っている』(Samuel Johnson is  
Indignant)をやる予定だったんだけど、  
やはりはじめると、なにか後ろ髪が引かれ  
るの。

都甲 『話の終わり』にですか？

岸本 なにかやり残している感じがして、『サミュエル・ジョンソン』がサクサク進まない。「じゃあ、もしかしてこっちなのかな」と思って『話の終わり』に着手したら、サクサクではないけれど、抵抗がなかった。どうも自分内順序があったみたいで。

都甲 その本のもっているパワーみたいなものですかね？

岸本 もしかしたら、リディア・デイヴィス自身も、『話の終わり』を書かないと先に進めなかったのかもしれない。簡単にあらすじを説明すると、語り手は翻訳もやっている小説家で、リディア・デイヴィス本人のようにも見えます。その人が、もう十年以上前にある男性と付き合っていたことを、出会いから別れまでの一部始終を思い出して書くこうとして、実際に書いている。のだけれども、これがなかなかうまくいかなくて、そのうちに「うまくいかない、その現在のうまいかなさ」についても書きはじめる。いちおう恋愛についての話なんだけれど、じゃあ恋愛小説かって言つと……。

都甲 違いますよね。ぼくはこれ、翻訳

家の愚痴小説だと思ったんです。それと、女性が女性であることへの違和感小説。

岸本 そうそう、恋愛部分が八割以上なんでしょう、すごく共感したのは、翻訳家あるある、なんですよね(笑)。

都甲 読んでて痛い。「あああああー」って叫びたくなりますよね。

岸本 たとえば、すごく難しくてももしろい本ほど時間をかけなきゃいけない、結果的に時給一ドル以下になっちゃう、とか(笑)。わたしもよく思いますもん、「マクドの方がぜんぜん高給だよー!」って。まあ、わたしの場合、時間がかかるのは自分のせいなんですけどね。あと「翻訳は不幸な時ほどはかどる」とか。

都甲 ああ、出てきましたね。男にフラれて、そのことをどうしても思い出してしまう。で、思い出さないためには翻訳がよいと。逆に彼とうまくいっているときには、とりあえず遊びに行ってしまうから翻訳どころではない(笑)。

岸本 で、ちようにどいい難しさの文章があれば、考えて解決したら達成感が得られてうれしいけれど、難しすぎると逆に跳ねかえされて、また彼のことを考えてしまう、とか(笑)。

**都甲** どうしても適切な訳語がわからな  
いと、「いい加減、答えを教えてください」  
って思うんだけど、クロスワードパズ  
ルと違って誰も正解を教えてくださいな  
いとかね。だから、「もう原語でいいじゃ  
ん」とか考えてしまっ。

**岸本** これ、すごくよくわかる(笑)。

**都甲** ちょっと脱線しますが、村上春樹  
さんが翻訳したフィッツジェラルドの  
『グレート・ギャツビー』で、ギャツビ  
ーが相手に「old sport」って言うでしょ  
う？ これを日本語で「よう、朋友」な  
んかにしたらおかしいですよ。村上さ  
んは二十年以上も考えたあげく、「オー  
ルド・スポーツ」ってやるしかないと思  
めたと言っている。

**岸本** まさにそれですね。

**都甲** 一般の人からすると、単に投げて  
いるだけにも見えると思うんですが、こ  
の選択はリアルですよ。

**岸本** 何十年も考えて「これしかない」  
ということであって。逆に「ここは違っ  
な」と思うのは、日本に比べてアメリカ

では翻訳家の地位がすごく低いという話。

**都甲** そうですよ。日本だと、たとえ  
ば柴田元幸先生だったなら、時に作者より  
大きく名前が書いてあったりするんです  
が、アメリカだと、表紙に翻訳家の名前  
なんてないですからね。中を開くと載っ  
ていますが、最悪どこにも載っていない  
ことさえあります。

**岸本** 仮に載っていたとしても、経歴な  
んぞ絶対に載ってないですよ。だから、  
『話の終わり』の語り手がパーティーで人  
と会って「わたし、翻訳家です」って言  
ったとたんに相手が露骨に「つまんない  
奴と当たっちゃった」って顔をして、別  
の人と話したがる素振りをする。だけど  
そういう語り手自身も、ほかの翻訳者に  
会うと同じ態度をとってしまう(笑)。そ  
こはやっぱ日本の翻訳家のほうが恵ま  
れていますよね。

**都甲** 翻訳家がこんなに尊敬されている  
のは、日本とかイスラム教の地域ぐら  
いで、他にはあんまりないらしいですよ。  
ヨーロッパ、アメリカではもうなめられ  
放題だと聞いています。

頭でっかちな人は、どんなふう  
に人生を次々と失敗するか。

**都甲** リディア・デイヴィスも「翻訳が  
好き」と言いながら、「あと何日で終わ  
らさないと家賃が払えない」と嘆く（笑）。  
もうねえ、辛いというか……よくわかる。

**岸本** 翻訳のギャラがいちどきに支払わ  
れるので、そのときはすくお金持ちに  
なった気がして、すぐに使っちゃうって  
いう場面がありましたよね。ここなんか  
も、「え、書いたのわたし!？」って。

**都甲** 「リディア＝自分だ」と（笑）。

**岸本** こと世知辛<sup>せちがら</sup>方面に関しては、すく  
く身につまされるし、笑えます。

**都甲** あと、頭でっかちでありながら、  
いろんなものに裏切られますよね。自  
分のからだとか、付き合っていた彼とか、  
みんな思い通りにならない。

**岸本** 十二歳年下の男と付き合っていて、  
付き合っている間はずっとツンケンして  
いたくせに、捨てられたら急に未練が爆  
発して、精神も崩壊してストーカーみた  
いになってしまっんですが、にもかかわ  
らず作中には「失恋」っていう言葉はた  
だの一度も出てこない。だからこれ、恋

愛小説の皮は被っているけれど、「自分  
観察日記」なんじゃないかと思うんです。  
生活のことにせよ、心の動きのいちいち  
にせよ、ひたすら自分を、アサガオを観  
察するみたいに観察している。

**都甲** 「悲しい」とかも、ほとんど出てき  
ませんね。

**岸本** 代わりに「息ができなくなった」  
とか「ものが食べられなくなった」とか  
「寝返りがうてなくなった」とかどこま  
でも観察スタイルなんです。この人は自  
分の頭のなかに住んでいるんだなあ、と。

**都甲** 彼女は大学で授業をするんです  
が、頭で予行演習して授業をやると必ず  
失敗する（笑）。つまり「頭でっかちな人  
が、どんなふう<sup>に</sup>に人生を次々と失敗する  
か」のドキュメンタリーになっているん  
ですね。フローベールの『ボヴァリー夫  
人』は、主人公のエマが、朝から晩まで  
ハーレクインみたいな本を読んで「すて  
きな恋愛がしたい」と言っていたあげく、  
恋愛に狂って死んでしまう衝撃の話です  
が、リディア・デイヴィスは、『ボヴァ  
リー夫人』を訳してもいますし、近代文  
学の伝統に則った、クラシックな主題を  
扱っているんだと思うんです。

聞き書きと『ひとりマトリックス』

翻訳漫談2

**岸本** “翻訳あるある”でいうとね、わたしは翻訳するときには聴覚経由なんです

よ。音楽が鳴っていると、翻訳ができな  
い。たしか柴田元幸さんと村上春樹さ  
んって、音楽をがんがん鳴らしながら翻  
訳できるとおっしゃってませんでした？

**都甲** そうですね。柴田先生が翻訳して  
いる横で、コンピュータを直していたこ  
とがあるんですけど、なんか音楽が鳴  
っていました。

**岸本** 『話の終わり』のなかに、階下でビ  
アノが鳴っていると、「自分が書くこうと  
している言葉が聴こえない」という一文  
があって、鼻血が出るほど衝撃を受けた  
んですよ。わたしも音楽が鳴っていると  
「あ、聴こえないー」ってよく思うんです。  
**都甲** 誰ぞやが頭のなかで語り聞かせて  
くれるんですか？

**岸本** いや、鳴ってるのを聞き取る？  
聞き書きみたいな感覚なんですよ。と言  
うとかっこいいけれど、全部がそうなん  
じゃなくて、調子がいいとそういう感じ

で訳せるんです。

**都甲** ぼくの場合は『ひとりマトリッ  
ク』と呼んでいるんですけど(笑)、書  
いた原稿が目の前に見えるんですよ。

**岸本** わ、それ負けた！(笑)

**都甲** (宙の一点を見ながら)字を読みなが  
ら写す感じですね。大学で授業してい  
ても、喋る内容を読んでいたりするん  
**岸本** 「君、ちょっと見えないからそこと  
いて」とか言ったりするの？

**都甲** それはないですけど(笑)。そうや  
って見ていると、学生もぼくが見ている  
空間を振り向いて見るんですが、確実に  
なにもないわけですよ。だって、学生が  
一緒に見て「なるほど」とか頷いたら  
嫌でしょう。とにかく、ぼくは聴覚じゃ  
ないです。

**岸本** じゃあ翻訳しながら音楽を聴いて  
も平気なの？

**都甲** いや、音楽はほとんど聞かないで  
す。音で思い出したんですけど、二〇  
〇〇年に村上さんと柴田先生の『翻訳夜  
話』という新書で、一緒に話しましたよ  
ね。村上さんと、さえない野郎どもが一  
緒に(笑)。

**岸本** 愉快な仲間たちがね。

**都甲** そのときに村上さんは「音読はしない」と言っていましたね。目で見た文章のリアリティは声に出したり耳で聞いたりするのとぜんぜん違うから、「科白なんかは口に出してしゃべっちゃうとすこく変に響くときがある」と言うので、ものすこいショックを受けました。

**岸本** 村上さんは、もしかして小説もそうかもしれないよね。

**都甲** そうでしょうね。だから、ぼく、まだ『ノルウェイの森』（トラン・アン・ユン監督）を観てないんですけど……

**岸本** 私は観た！（笑）

**都甲** けっこう会話が寒いんじゃないかと思っ行ってけないんですよ、こわくて。

**岸本** 本当に松山ケンイチが、「株式とか動詞の活用とかスエズ運河のことを考えながらマスターベーションする男はいないさ」とか言うの。

**都甲** めっちゃ棒読みじゃないですか！（笑）  
**岸本** 会話はわりと原作に忠実にやってみたいのね。正直それがちょっと裏目に出ているところもあった気がする。

**都甲** でも、本で読んだらノリノリじゃないですか。音読なのか黙読なのか、いろいろと難しい問題があるかなあと思う

んですよ。

**岸本** 訳すときに、英文は音読しないで  
すか？

**都甲** 会話文がね、目で追って読んでるとよくわからないことが多いんですね。そういうときは、音読するとなんとなくわかることがあるでしょう？ 特に訛っている英語はわかりませんよね。

**岸本** あ、訛り問題直面中ですよね（笑）。あとで詳しく訊きたいんですが、いま翻訳してらっしゃるジュノ・ディアスはこの出身でしたっけ？

**都甲** 彼はドミニカ共和国ですから、出てくる言葉はスペイン語と英語の混ざった、いわゆるスパングリッシュです。ラテン系の英語や黒人英語は、綴りまで独創的に変えたりするじゃないですか。そういう場合は何回も音読してやっという意味を推定したりします。

**岸本** 省略のアポストロフィーだらけとか？

**都甲** そう。もともとは言葉ですから、耳で入ってくるものかなと思うんですけど、字になると難しいですよ。

SF、アニメ、マジック・リアリズムと  
呪術、史実が混濁して

**岸本** そのジュノ・ディアスについて、  
すこし説明してもらえますか？

**都甲** ジュノ・ディアスはドミニカ共和  
国出身で、小学生のときにアメリカ合衆  
国に来て、スペイン語から英語にチェン  
ジしたという作家なんです。ドミニカ共  
和国や、アメリカのドミニカ系のコミュ  
ニティの話を描いた短篇集を出して。

**岸本** 『ハイウェイとゴミ溜め』ですよね。

**都甲** それだけでものすごく評価されて、  
マサチューセッツ工科大学の先生にな  
った。で、「二作目も出してくださいよ」  
と言われつつけて十年以上過ぎ、やっと  
出たのが『オスカー・ワオの短く凄まじ  
い人生』という作品なんです。

**岸本** 衝撃的な内容ですけど。

**都甲** 当然ドミニカだから中南米文学の  
感じがあって、独裁者の話もする。そ  
れから、主人公はオタクの男の子で、日  
本のアニメが好き。『宇宙海賊キャプテ  
ンハーロック』とか、『宇宙戦艦ヤマト』  
とかを見て、頭の中がアニメの世界観に  
なってるんです。

**岸本** え、ヤマトとか出てくるの？

**都甲** 『AKIRA』とかSFのフォーマ  
ットで、中南米のマジック・リアリスム  
的な世界を物語るんです。ぜんぶ一緒  
になって、わけのわからないことになっ  
てます。

**岸本** それを最初に聞いたとき、そのふ  
たつの作品が同一人物のものだとはずぐ  
にはわからなくて。だって雰囲気がぜん  
ぜん違わないですか？ 『ハイウェイと  
ゴミ溜め』は「鮮烈な青春文学」みたい  
な感じじゃなかったでしたっけ？

**都甲** まるで違いますよね。本人は、マ  
イノリティ文学の枠というか、「貧しく  
て世界の隅っこの方でがんばってるけど、  
希望は捨てません」みたいなものに飽き  
足らない人だったんですね。だけど、ア  
メリカのなかで、それ以外のフォーマッ  
トが見つからなかった。だから、自分の  
経験してきた複数の文化と、それから  
サブカルをぜんぶ含んで書けるフォーマ  
ットを開発しながら小説を書いたために、  
めったやたらに時間がかかったんじゃな  
いかと思うんです。

**岸本** そつえば、Almost No Memory  
を買ったあとに『オスカー・ワオ』を



amazonでしつこく薦められたなあ。

**都甲** コンピュータに薦められるがままの人生ってどうなんですか、正直(笑)。

**岸本** 機械に完全に見切られている人生です。でも、これはあまりに難しそうです。思って諦めたんですよ。これ、スペイングリッシュでしよう？

**都甲** そう。問題点があつて、作品の結構の部分がスペイン語で書いてあるんですよ。しかも、英訳が載っていないくて、巻末を見てもグロツサリー(用語解説)がっていない。スペイン語版にはグロツサリーがあるんですけど……。

**岸本** スペイン語が読めない人には意味がない！(笑)

**都甲** 推定して読んでくださいね、と。すべての読者がどこかしらわからないように書いてあるんです。本人はインタビューで「なぜこういう書きかたをしたのか」と訊かれて、馬鹿言うな、と返す。「アメリカ合衆国にはスペイン語話者があるものすごくたくさんいるってことに、みんなもうそろそろ慣れてもいいころなんじゃないの」(Gate Review)とか言っている。**岸本** それはちよつと「ザマミ口」的なというか復讐心があるでしょう。

**都甲** 嫌味と、それからアヴァンギャルド心が合体した感じですかね。でもおもしろいですよ。日本語版は、親切にぜんぶに訳がついていますので、日本語版が世界初の完全版です(笑)。

**岸本** いやほんと、苦勞がしのべれます。

**都甲** ここで、カリブ文学入門なんですけど(笑)、カリブ地方つてすごくおもしろい文学がいっぱいあるんですよ。なぜかと言うと、黒人奴隷貿易が盛んに行われていた時代に、西アフリカから、中継点であるカリブ地方にたくさん黒人が来た。そもそも隣の島同士でも言葉が違ふところに、宗主国のスペインやオランダ、イギリスの文化が混ざっている。当然、中南米のマジック・リアリズム的な文化も入っていて、他方、アメリカ合衆国の影響も受けています。なんでもかんでもが一緒になっているために、えらい複雑な文化状況なんです。そのなかで文章を書いていると、使う材料がいっぱいある。たとえば「フク」という信仰があるののひとつです。西アフリカのナイジェリアや、コートジボアールあたりの精霊信仰や原始宗教から来ているんですが、呪いかけるとかけられた人が、両方と

も信じちゃっているから本当に死んだりする。

**岸本** え？ 現実世界でもそうなんですか？

**都甲** おそらく。少なくとも『オスカー・ワオ』ではそうです。それが西インド諸島のプエルトリコだろうが、マルティニークだろうが、今回のドミニカだろうがハイチだろうが、さまざまな作家が共通点のある内容の作品を違う書きかたでやっている。たとえば、フランス語圏のマリー・ンディアイだったらヌーヴォー・ロマン風に書いたりと、工夫しながら多様なものを作っているんです。

**岸本** 「ブク」みたいなものは、他の作品にも同じ名前でしょうっちゅう出てくるんですか？

**都甲** 名前はちょっとずつ違うんですけど、呪いを言っただけで、人が死ぬ場面が出てきますね。アメリカ南部にもそういう文化がけっこうあるんです。だからアメリカ文学を大きく考えていったときに、ドミニカの作品を読むものもなかなかおもしろいんじゃないかなと、最近は思っています。

カリスマ学部生と無意識過剰な教師

**都甲** 『話の終わり』は、二五〇ページ以上にわたって昔の男のことを書いていくせに、その男の名前が最後までわからないんですよ。

**岸本** そうそう。

**都甲** でも、彼のファーストネームは一音節で、名字はやたらと子音が多くて発音が難しいとか、ヒントは書いてある。もう読んでイライラしちゃって(笑)。

**岸本** そこまで書くなら、教えるよ！って(笑)。

**都甲** 結局、最後まで読んでもわからない。これは「わからない」ことが大事で、作品にわざと穴があけてあるんですね。彼の名前を呼ぶ／呼ばない、読者に教える／教えないことで最後まで引っぱる、そのリアリティはなんなのかなと思ったんです。

**岸本** 男の名前を書かないことに決めるまでのプロセスも書いてあるんですよ。語り手は、相手の男と、自分の分身みたいな女の名前をどうするか散々考えて、男にハンクって名前をつけた。で、分身の女をローラとか、スーザンとかにする

んだけれど、スーザンという名前の女は、ストーリーしたり、バカなことはしたりしないなあ、とかいろいろ考える(笑)

**都甲** ハンクが好きでした。「ハンクなんていう名前の男を好きになる人間がいるとは思えない」し、友だちに言ったらハンカチみたいな名前と言われてすごく不愉快だったので消したって(笑)。どんな小説だよ！

**岸本** ステファンにしていたこともありましたね。

**都甲** そしたら今の夫に「ヨーロッパ風で気に入らない」って言われて止めるんですよ。

**岸本** なんて夫が嫌がったかと言うと、はっきりは書いていないんですけど、夫は妻が書いている小説には、彼女の恋愛遍歴がいろいろ書いてあるに違いないと思ってるんですね。とくにヨーロッパで、妻が今までに破廉恥な恋愛を重ねてきたはずだ、と思っ込んでる。

**都甲** でも夫はこの作品を読んだら引くと思いますよ。だって、ちょっとだけ付き合った相手のことも、いっぱい書いてるじゃない。

**岸本** デートにお母さんを連れてくる男

とか、変な空き家の二階に住んでいる男とかね。この主人公、なにモテてるんですかね！(笑)

**都甲** え!? 反感ですか、それは。

**岸本** いや、羨みですね。

**都甲** 羨み(笑)。でも、本人は絶対モテないと思ってるんですよ。自分は理屈っぽいし、男と別れたあとは、彼と付き合っている女を憎み、若い女一般を憎み、この街の女全員を憎んだみたいなエグいところがあるし。

**岸本** ところで都甲さん、この相手の男ってどう思いました？

**都甲** いや、嫌いですね。あのねえ、まざイケメンでしょ？

**岸本** イケメンとは訳してないけど(笑)。

**都甲** そこそイケメンだということにしよう。

**岸本** これ反感、ます。

**都甲** そしてけっこうガタイがいい。おそらく格好がグランジっぽい。カート・コバーンみたいな方向でお洒落なんですよ、きっと。

**岸本** そのくせお金はない。

**都甲** 「金ないけど、なんかみんな食わしてくれんだよね、それはおれが魅力的

だから」みたいなことを言う。

**岸本** 言っていないけどね(笑)。

**都甲** 事実上言っている。それから困ると、適当な女のところに転がり込んで暮らしているけれど、「べつにそいつが好きなのじゃないんだ。本当はお前しかいないんだ」と主人公に言う感じとか。ぼくは三四歳の女性と一体化して読んだので、年上の女性が、すごくかわいい男の子を「もうたまらない」と思う気持ちはわからんでもない。けど本を置いて男に戻る

と、こんなイヤな奴はいないですね。

**岸本** 訳しててなにが辛かったって、この「彼」がまったく魅力的に思えなくて、いちいちイラツとするんですよ。嘘つきというわけではないんだけれど、言動が無責任なんですよね。無意識に事実と違うことを言ったりする。

**都甲** 「ポルトガルの魚スープを作るのが得意」とか言うんだけれど。

**岸本** ちゃんと聞いてみると、「まだ一度も作ったことはないがたぶんうまく作れると思う」に変わる(笑)。

**都甲** 「いるいる、こういう奴ー」って感じでしたよね。カリスマ学部生の男の子とか。

**岸本** カリスマ学部生!! なにそれ、そんなのがいるの?(笑)

**都甲** 当たり前じゃないですか。

**岸本** そういう子は学業的にはどうなんですか?

**都甲** 意外と成績いいです。

**岸本** そこがまたイラツとくる!

**都甲** でも、無責任でかつ成績が悪かったら、腑に落ちるでしょう? でも世の中は腑に落ちないこと多いじゃないですか。

**岸本** 魅力とウザいところが斑まだらになってるんでしょうね。

**都甲** でも、この作品はそこがいいところだと思っんですよ。主人公が女性の大学教師でしょう。その相手が、五〇歳のナイスミドルで物をよく知っていて、理解してくれる男だったら、なんにもおもしろくない。彼の魅力を「ワインに詳しいの」とか言われた日にはぶざげんな! って話じゃないですか。逆に、この小説は、自分でもなくて好きなのかわからなけれど、動物的に、性的にただ惹かれて、自分の無意識も行動もぜんぜんコントロールできないことを描く。

**岸本** 最初から最後まで男の話をしてい

ながら、彼の魅力は伝わらず、頭のいい女の人が、こんな男に惚れちゃうその部分が、まったくのブラックボックス。

**都甲** 『ほとんど記憶のない女』にも、「わたしのようにインテリに囲まれて、常にものをうごうご考え続ける女は、カウボーイと付き合うしか、こんな人生から抜け出す道はない」と断言して、でも身近にカウボーイはいないので、ベトナム帰還兵と付き合う話がありましたよね。

**岸本** そうそう(笑)。この人って、ちょっとだめんず・うおーかー”っぽいんですよ。そのカウボーイも自分の授業に來ていた生徒なんですよね。「あ、この人カウボーイっぽい」と思うんだけど。**都甲** 根拠がない。

**岸本** 実際は、発掘したチンパンジーの骨を継ぎ合わせる仕事か何かをしている(笑)。あとトロンボーンを吹いてて、全身黒ずくめで、一滴もカウボーイじゃないんだよな。

**都甲** 崖の上で熱烈にキスしたあと、「別居中の妻とまたいっしょに住むから、もう会えない!」と言われて、「ええ!?!」みたいな。

**岸本** 「大学教授」という短篇ですね。

**都甲** 大学の先生なにやっつてんだかねえ、心配ですけどね(笑)。「相談なら乗るよ」って感じですよな。

**岸本** 相談に乗られても困りますけどね。頭ばんばんにふくらんでるじゃないですか。

**都甲** 『話の終わり』の主人公は、同居しているニューエイジな女の人に相談したあげく、何回も止められるんだけど、どうしてもストーリーカー行為をやめられない。彼のものらしき車を見つけたら、車の前のバンパー同士をつき合わせるように駐車して、確かめたりする。明らかに違法行為ですよな(笑)。

**岸本** いや、ほんとに全篇、「姐さん、なにやっつてんすか!」って言いたくなりります。

「リア・デイヴィス」ができるまで

**都甲** 岸本さんは『話の終わり』の少し前に、ミランダ・ジュライの『いちばんここに似合う人』も翻訳しましたよね。お聞きしたいのは、ミランダ・ジュライとリア・デイヴィスは、キャラがカブるような気がするんですよ。モテる版

モテない版なんです。ミランダ・ジュライはモテる版。

**岸本** いや、でも非モテ度はミランダのほうが高い気がする。

**都甲** その論争ですか？

**岸本** その論争はやめましょう(笑)。でも、ミランダ・ジュライがリディア・デイスの歳になったら案外似た感じになっっているかもしれない。

**都甲** ふたりとも、自分ドキュメンタリー、でも無意識過剰な感じが近いと言えそう。

**岸本** かなり痛い自分を平気で書いちゃって、その痛さが突き抜けてユーモアになるところ、とかね。自分のことを書いているようで、絶妙に自分から距離をとっているところがありますよね。

**都甲** そうすると、やっぱり「リディア」

**岸本**「？」(笑)。

**岸本** え？

**都甲** 『話の終わり』の主人公が、公衆浴場で女性のからだをものすごく観察して、どうしてこんなにバリエーションがあるんだと驚くじゃないですか。岸本さんも銭湯に行っているんな人のからだをものすごく観察したって言っていた気がする。

**岸本** え!? それ夢でしょ?(笑)

**都甲** ばくの妄想かなあ？

**岸本** えーとですね皆さん、「都甲変換」という言葉があつてですね。都甲さんのなかで記憶が捏造され、そして定着され、こうやって話すことによってさらに定着してしまうという、恐るべき現象です(笑)。まあでも、それはたしかに考えたことあるから、本当に言ったのかもしれない。

**都甲** でしょう? そうしたら、小説のなかにそのまんまの描写が出てきて、「こわっ!」と思っただんです。訳しながら書き加えました?(笑)。

**岸本** 加えないよ!(笑)でもじつは、衝撃の「あるあるポイント」があつて。

「私は自分のことをことさら女だとは思っていないかった」という一節があつて、鼻血が出るほどびっくりしたんです。「なぜそれを知っている!?」と。

**都甲** 「なぜ!」って言われても、そんなの知りませんよ(笑)。でも、単に「おもしろい」というだけじゃなくて、どういうふうに着目してどういうふうに着目しているかも、よくわかるように書かれている点が、『話の終わり』の魅力であり、

岸本訳の魅力なんじゃないかという気が  
します。

**岸本** その意味でも、『話の終わり』は  
『リディア・デイヴィス入門』としてい  
いんじゃないかと思うんです。『メイキ  
ングオブ』になっているから。

△△

岸本佐知子（きしもと・さちこ）

六〇年生。キテレットかつキュートな英米小説を数多  
く翻訳。訳書にニ科尔ソン・ペイカー『中二階』ほか。  
アンソロジー『恋愛小説集』シリーズの編訳も手が  
ける。『ねにもつタイプ』などの不思議な妄想エッセ  
イでも、読者の度肝を抜く。翻訳・エッセイともに  
中毒者多数。

都甲幸治（とこう・こうじ）

六九年生。二六歳で『コウスキー』『勝手に生きろ！』  
を翻訳のち渡米。その間の葛藤も書かれた『偽アメ  
リカ文学の誕生』は、村上春樹や現代米国の作家を  
広くカバー。英語圏の小説を逸早く紹介する「生き  
延びるためのアメリカ文学」を連載。本文でも登場の  
ジュノ・デイアス『オズカー・ワオの短く凄まじい  
人生』（久保尚美と共訳）が好評発売中。

この対談は、『リディア・デイヴィス』話の終わり』（作品社）  
刊行を記念して、10年12月19日にオリオン書房ノルテ店で  
行われたものを再構成、および加筆修正を施し、「早稲田  
文学フリーペーパーWB Vol. 22」（11年3月発行）に掲載。  
さらに未収録の部分を加えたものです。

copyright by Kishimoto Sachiko, Toko Koji 2011  
published by Wasedabungaku 2011